

挨拶

北海道土木技術会会長 菅原照雄



昨年度も官学民の密接な協力のもとに、北海道土木技術会各研究委員会が活発な活動を続けられ、多くの成果をあげられたことに対し、深く敬意を表したいと存じます。

自由活達な研究活動を特色としてきた土木技術会の活動についても、時代の流れにともなって、さまざまな問題点が指摘されるようになっており、これからの社会に対応した体質改善が求められてきているのではないかと思います。前回の総会時に前会長から、法人化について検討を進めては如何との引き継ぎがあり、幹事長を中心として、各方面の意見を伺うと同時に2回にわたり幹事会を開き、各委員会の考え方、今後の進め方などについて話し合っていました。

今回の総会では今後技術会の伝統と特色を損ねることなく、不備を指摘されている規約の改正や、法人化するとした場合の活動のあり方などについて前向きに慎重な検討を進めていくことになりました。

昨年来数回にわたり、アメリカ、ヨーロッパ諸国の道路技術について調査する機会を得ました。アメリカでは広い分野にわたり、官学民がSHRPに結集して革新的な研究を進めていることに深い感銘を受けると同時に、その底力に何か恐ろしささえ感じました。ヨーロッパ諸国では本年末のEC統合をひかえて、道路の材料や構造の共通仕様書の作成について非常に真剣な議論が続けられており、道路技術についても国境がなくなる日が近いことを痛感させられました。この数年間あらゆる技術分野でアメリカ大陸とヨーロッパの2大陸間交流が非常に活発になっており、また、一方旧ソ連、東欧諸国支援を巡って、技術的な影響力の行使をねらうかのような動きも先進諸国で見られるようになっております。

世界をにらみながらの土木技術会の皆様のご今後の活動をご期待申し上げたいと存じます。

本部の活動報告

平成4年度の第1回役員会が7月に開催され、平成3年度における本部、各研究委員会の活動報告および本部の決算報告、平成4年度の本部、各研究委員会の事業計画および本部の予算案などについて討議された。以下、その概要について述べ活動報告とする。

平成4年度第1回役員会

と き	平成4年7月31日	14:00~16:00	
と ころ	KKR札幌	3階	エルム
出席者	会長 菅原照雄	副会長 渡辺 健, 太田利隆	幹事長 森 康夫
	鋼道路橋研究委員会	委員長 渡辺 昇	幹事 勝俣 征也
	コンクリート研究委員会	委員長 角田興史雄(欠)	幹事 佐伯 昇
		代理 花田 真吉	
	舗装研究委員会	委員長 久保 宏(欠)	幹事 笠原 篤
	道路トンネル研究委員会	委員長 芳村 仁(欠)	幹事 林 脩
	道路研究委員会	委員長 加来 照俊	幹事 小長井 宣生
	土質基礎研究委員会	委員長 土岐 祥介(欠)	幹事 能登 繁幸
	事務局	秋田 稔	

以下の点について報告あるいは討議があった。

1. 平成3年度の事業報告ならびに本部決算報告

1) 本部の事業概要(自H3.4.1~至H4.3.31)

(1) 役員会1回(H3.7.11)、幹事会1回(H3.6.18)

上記、役員会の討議内容は、会報17号に記載の通りである。

幹事会においては、主に法人化および「土木の日」協賛事業について本会としての取り組み方、平成3年度の事業計画などについて話し合われた。

(2) 北海道土木技術会会報17号を発刊(1150部)、配布した。

(3) 土木学会北海道支部で行う「土木の日」の諸行事に後援団体として参加した。

なお、上記諸行事の内「小学生の土木の絵」図画コンクール展(H2.11.14~11.19 於 札幌市役所本庁舎1階市民ホール)では土木技術会長賞を贈呈している。

(4) 各研究委員会発行の図書のコード化について検討した。

(5) 本技術会の(社団)法人化について、その必要性、今後の議論の方向について検討した。

その概要は、平成4年度の事業計画(4ページ)に経緯を含めて一括記載した。

2) 平成3年度本部決算報告(自H3.4.1~至H4.3.31, 5ページに記載)

3) 各研究委員会の事業概要(7ページ以降に記載)

2. 平成4年度の事業計画および本部予算

本部の事業計画(案)と予算(案)の説明があり、了承された事業概要は次の通りである。なお、

各研究委員会ごとに報告のあった事業計画は、7ページ以降に記載の通りである。

また、本部予算は6ページに記載した通りである。

1) 「土木の日」協賛事業

6研究委員会の内、5研究委員会で「土木の日」の協賛事業を実施する予定であり、事業内容により大別すると

写真パネル展示……鋼道路橋、舗装、道路トンネルの3研究委員会

講演会……コンクリート、土質基礎の2研究委員会

となり、それぞれの事業について以下の通り合同開催することとなった。

(1) 写真パネル展示

イ. 開催日：平成4年11月17日(火)～23日(月)

ロ. 場所：札幌地下街オーロラスケアー

ハ. 主催：北海道土木技術会

鋼道路橋、舗装、道路トンネルの3研究委員会

協賛・後援等は未定

ニ. テーマ(仮題)：北海道の橋梁・舗装・トンネル写真パネル展

ホ. 規模(変更の可能性あり)：

○ 基礎パネル(120cm×180cm)17セット(34面)

○ 3研究委員会の基礎パネル分担面数

鋼道路橋研究委員会 9面

舗装研究委員会 7面

道路トンネル研究委員会 9面

(2) 講演会

イ. 開催日：平成4年11月中旬～12月上旬

ロ. 場所：同一会場

ハ. 主催：北海道土木技術会

コンクリート、土質基礎の2研究委員会

協賛・後援等は未定

ニ. テーマ：未定

以上の事業を円滑、効果的に行うため、「土木の日」協賛事業実行委員会および準備会を設け、必要事項、詳細内容の決定、各研究委員会間の調整を行うこととした。

また、上記事業の経費および受付等の必要な要員は、参加する各研究委員会で負担する。

なお、土木学会北海道支部が行う「土木の日」各種事業については、平成3年度と同様に後援団体として参加する。本部予算が必要な場合は、予備費から支出する。

2) 法人化について

(1) 経緯についての概要

平成2年度役員会において、長縄前会長から「本会の法人化について検討すべき時期に来ているのではないか」との提案があった。これを受けて平成3年度の幹事会および役員会においては「一般的な社団法人化のために必要な基本的条件、得失の概略」などに関する調査結果について議論したが、「本会の長所を可能な限り残す方向で前向きに検討してはどうか」という結論であった。

(2) 今年度の取組と議論概要

平成4年度に入り、法人化の必要性(現体系の問題点)、現時点での法人化に対する問題点および今後の議論方向などについて、より会としての意見を集約しておく必要があるとの判断から幹事会(2回)と役員会においてそれらの点について議論がなされた。

主な議論概要は以下の通りである。

イ. 法人化の必要性(現体系の問題点)

現行の規約をより整備すべきである

活動結果・成果品の位置付けが関係者以外に不明確である

会計経理等により改善すべき点がありはしないか

関係官庁の理解・協力が得にくい場合がある

図書の発刊はほとんどがボランティアによっている、著作権の所在等も問題がある

ロ. 現時点での法人化に対する問題点

既設の団体と事業目的・内容が重複する

資金的な制約を受ける可能性がある

法人化によって事務局の設置が必要となる上に、従来の活動継続を考えれば、会費の値上げあるいは収益事業が必要になり、結果的に制約を受ける可能性がある

各委員会の自主的活動に制約を受ける

公益的かつ統一的な活動の必要性から従来の自由な活動に制限が加わる

資金面から制約を受ける可能性もある

ハ. 今後の議論方向

客観的に考えて今後の進むべき方向として次の3つが考えられる

1. 任意団体として活動を継続する
2. 独自の法人化を目指す
3. 既設の法人内で活動する

以上の各項を踏まえて、法人化に対して条件付き積極派から反対派まで様々な考え方が示された。

結論としては、法人化については、判断材料が不足しており、ケーススタディーを行う等して具体的な制限内容が提示された時点で再度議論する。また、本部規約の不備な点についても今後幹事会などを通じて検討していくこととなった。

3) 会報18号の発刊

従来通りの構成とし、活動報告以外の事業紹介等の記事はコンクリートおよび舗装の2研究

委員会にお願いすることとなった。

4) 図書のコード化

各研究委員会発行の図書目録の内、必要な出版物について I S B N (国際標準図書番号) に基づきコード化することとなっており、今後の取扱は以下のようにすることとなった。

- (1) 会報16号に掲載した図書目録のうち必要なものについては I S B N を付した
- (2) 会報16号に掲載した図書目録以降に発行した図書目録で I S B N に登録希望の図書があれば図書名、発行年月、価格等を事務局に提出する
- (3) 上記の整理がつき次第、各委員会で発行の都度、事務局に連絡し登録番号を確認の上使用する

3. 本部役員の変更

今回の役員会からコンクリート研究委員会の委員長、幹事が前ページの役員会出席者の箇所に記載した通り、変更になった。(詳しくは12ページ参照)

平成3年度本部決算報告・平成4年度予算

1. 平成3年度本部決算報告(自 H3. 4. 1~至 H4. 3. 31) (単位: 円)

収入の部

1. 前年度よりの繰越金	507,186				
2. 事務局賦金	618,000	鋼道路橋	70,650	コンクリート	37,200
		舗装	34,500	道路トンネル	112,200
		道路	367,301	土質基礎	51,600
3. 雑収入	19,883	預金利息	18,370	その他	1,513
合計	1,200,520				

支出の部

1. 会議費	78,856	役員会 1回	幹事会 1回		
2. 印刷費	180,250	会報17号印刷(1150部)			
3. 通信費	39,102	切手 3,413	会報送料	35,689	
4. 備品費	423,124	複写機 360,500	事務用椅子(2脚)	62,624	
5. 雑費	35,602	謝金 20,000	新聞代	14,140	
		払込手数料	1,462		
合計	756,934				

収支決算

収入 1,200,520 - 支出 756,934 = 残額 443,586 (次年度へ繰越)

2. 平成4年度予算 (自 H4.4.1~至 H5.3.31)

(単位：円)

収 入 の 部

1. 前年度よりの繰越金	443,586	
2. 事務局賦金	346,000	前年度実績
3. 雑収入	20,414	預金利息

合 計 810,000

支 出 の 部

1. 会議費	64,000	役員会 1回	幹事会 2回	
2. 印刷費	180,000	会報18号印刷		
3. 通信費	40,000	会報送料	36,000	切手 4,000
4. 備品費	8,000	手提金庫	8,000	
5. 雑費	34,600	新聞代	14,600	謝金 20,000
6. 予備費	483,400			

合 計 810,000

但し、「土木の日」の協賛行事に関連する支出のある場合は、予備費より支出する。

「土木の日」および「くらしと土木の週間」について

11月18日は「土木の日」です。また、11月18日から24日までの一週間は「くらしと土木の週間」です。この機会に、土木技術および土木事業に対する国民各層の理解を深め、社会資本整備の意義と重要性について幅広いコンセンサスを得るよう、努力しましょう。

各研究委員会の活動報告

I. 鋼道路橋研究委員会 (昭和40年2月設立 会員313名)

(委員長 渡辺 昇, 副委員長 上田正昭, 荒木良悦, 事務局長 勝俣征也)

平成3年度事業報告

1. 文献小委員会 (小委員長 佐藤 浩一)

A S C E (アメリカ土木学会) 論文集の文献目録 Engineering Mechanics (1986~1991) を印刷, 製本し会員に配布した。

2. 設計仕様小委員会 (小委員長 上田 正昭)

「北海道における鋼道路橋の設計及び施工指針」の検討, 配布を行った。

3. 写真集小委員会 (小委員長 福本 淳)

「北海道鋼道路橋写真集第7集」発刊のための資料収集を行った。

4. 講習・講演小委員会 (小委員長 布施 正義)

1) 写真パネル展 (H3. 11. 17~23 於 札幌地下街オーロラスケアー 観覧者 13,000名)

土木の日分科会の「北海道の夢のかけ橋, 白鳥大橋・美原大橋」写真パネル展に協力した。

2) 溶接技術講習会 (共催) (H3. 11. 21 於 ポールスター札幌 参加者 50名)

主催: 溶接学会北海道支部

「溶接用アルミニウム合金の選定指針」 ㈱日軽技研 松本 二郎

「アルミニウムの溶接について」 日本ウエルディング・ロッド 鬼東 義美

3) 映画会 (H4. 1. 17 於 北海道建設会館 参加者 86名)

「高速湾岸線 荒川橋」 25分

「日本の鉄鋼」 20分

「国道274号開通をめざして」 20分

「一面吊斜張橋 花畔大橋」 31分

4) 講演会(1) (H4. 2. 25 於 KKR札幌 参加者 155名)

「土木分野におけるチタン防食の開発」 新日本製鉄㈱ 高橋 庸雄

「鋼管杭基礎の新工法」 新日本製鉄㈱ 中野 賢一

「東京湾連絡橋のケーブル工事」 新日本製鉄㈱ 今野 信一

道路用景観製品

「トンネル内装板」 日鐵建材工業㈱ 目黒 武

「道路用化粧板と景観タルフォーム」 日鐵建材工業㈱ 松井 清

5) 講演会(2) (H4. 3. 10 於 KKR札幌 参加者 117名)

「伸縮継手のない橋梁 (新七種橋の施工報告)」 ㈱神戸製鋼所 沼田 克

「橋梁用ケーブルの最近の話題」

㈱神戸製鋼所 杉井謙一

「最近の溶接材料と施工」

㈱神戸製鋼所 阿部知之

「新素材ロープ (F I B R A)」

㈱神戸製鋼所 島本明

5. 振動小委員会 (小委員長 林川俊一郎)

以下の通り3回に亘り研究会を開催した。

1) 第1回 (H3.12.18 於 アスティ45ビル 参加者 8名)

今年度の活動方針について

「骨組構造物の限界状態設計に関する最近の話題」 北海学園大学教授 当麻庄司

2) 第2回 (H4.3.2 於 アスティ45ビル 参加者 16名)

「石狩川橋の振動試験について」 日本道路公団札幌建設局構造技術課長 檜山義光
㈱ピー・エス技術部主任研究員 久保明英

3) 第3回 (H4.5.13 於 アスティ45ビル 参加者 21名)

「寒冷地における免震橋梁の問題点について」

北海道開発局開発土木研究所構造研究室 谷口秀之

6. 技術調査小委員会 (小委員長 中野修)

以下の通り3回に亘り講師を依頼して勉強会を開催した。

1) 第1回 (H4.5.13 於 アスティ45ビル 参加者 25名)

「鋼橋の非破壊評価と余寿命評価について」 北見工業大学教授 大島俊之

「橋梁交通振動小委員会のめざしているもの」 北海道大学助教授 林川俊一郎

2) 第2回 (H4.6.25 於 アスティ45ビル 参加者 45名)

「WHAT IS OPUTIMIZATION?」 室蘭工業大学助教授 杉本博之

「土木工学分野における衝撃問題」 室蘭工業大学助教授 岸徳光

3) 第3回 (H4.7.21 於 アスティ45ビル 参加者 40名)

「米国における橋梁マネジメントの現状について」

(協賛: 室蘭工業大学学術国際交流基金) ニューヨーク市立大学助教授 斎藤満

7. 歴史小委員会 (小委員長 丹野次男)

昭和61年度から平成3年度までの鋼橋発注記録を整理した。

(発注総数は1,027橋 うち完成橋は1,014橋であった)

8. 景観小委員会 (小委員長 渡辺昇)

「さっぽろの橋41選—'92」を札幌市建設局と協力して編集発刊し、配布した。

9. 「土木の日」分科会 (分科会長 丹野次男)

下記の要領にて写真パネル展を開催した。

1) 開催日 平成3年11月17日(日)~11月23日(土)

2) 場所 札幌地下街オーロラスケアー

3) テーマ 北海道の夢のかけ橋, 白鳥大橋・美原大橋

4) 展示内容 パネル総数 (43パネル), ビデオ一式, リーフレット 3,000枚配布
展示模型 (白鳥大橋・美原大橋, 全体模型, ケーブル, サドル, 伸縮継手, 制振装置)

5) 観覧者数 13,000名

なお, 後援団体は, 北海道開発局, 札幌市, 室蘭市, (社)日本橋梁建設協会
協賛団体は, 橋梁メーカーなど7社である。

10. 耐風設計小委員会 (分科会長 渡 辺 昇)

以下の通り5回に亘り小委員会, 講演会等を開催した。

1) 第1回 (H3.9.20) 及び第2回 (H3.10.7)

今年度の活動方針, 「土木の日」のイベント参加及びパネル製作に関して打合せた。

2) 第3回 (H3.11.19 於 すみれホテル 参加者 36名)

「箱桁の渦励特性について」

日本鋼管(株)応用技術研究所耐風構造研究室長 藤 澤 伸 光

3) 第4回 (H4.1.21 於 KKR札幌 参加者 28名)

「橋梁構造における風圧分布と耐風性の評価」

住友重機械工業(株)橋梁鉄構事業部技術室課長

兼 技術本部平塚研究所流体力学研究室主任研究員 宮 崎 正 男

4) 第5回 (H4.6.22 於 KKR札幌 参加者 59名)

「橋梁の耐風設計基準および耐風性調査の実際」

建設省土木研究所構造研究室 日下部 毅 明

平成4年度事業計画

1. 文献小委員会 (小委員長 佐 藤 浩 一)

鋼橋に関する文献目録の収集を行い, 印刷, 製本し会員に配布する予定。

2. 設計仕様小委員会 (小委員長 上 田 正 昭)

「北海道における鋼道路橋の設計および施工指針」の検討, 配布を行う。

3. 写真集小委員会 (小委員長 福 本 淳)

第7集 (昭和63年以降) の印刷, 発刊をする。

4. 講習・講演小委員会 (小委員長 布 施 正 義)

講習会, 講演会, 映画会, 見学会等を合計4回程度, 会員の要望を反映して行う。

5. 振動小委員会 (小委員長 林 川 俊 郎)

1) 橋梁振動に関する最近の情報および資料収集を行い, 検討会を開催する。

2) 「設計及び施工指針」の改定に関する検討を行う。

6. 技術調査小委員会 (小委員長 中 野 修)

鋼道路橋に関する各種規定, 新技術に関する調査検討を行う。

7. 歴史小委員会 (小委員長 丹野次男)
 - 1) 平成3年度下期の鋼橋発注記録を収集整理する。
 - 2) 昭和61年度から平成3年度までの鋼橋発注記録の保存方法 (印刷等) を検討する。
 - 3) 平成4年度以降の鋼橋発注記録収集について具体策を検討する。
8. 景観小委員会 (小委員長 渡辺昇)
 - 1) 「北海道における鋼道路橋の設計及び施工指針」の改定にともない「11章 橋の景観設計」の見直し作業に入る。特に、次の事項を検討する。
 - (1) CG (コンピュータグラフィック) (2) 植樹, 造園 (3) 色彩
 - 2) CGの勉強会, 植樹, 造園の勉強会などを開催する。
 - 3) 「美しい高欄・親柱」, 「さっぽろ創成川の橋」, 「うつくしい歩道橋」, 「美しい橋詰広場」などの写真集の刊行を検討する。
9. 耐風設計小委員会 (小委員長 渡辺昇)
 - 1) 「北海道における鋼道路橋の設計及び施工指針」の改定にともない新しく「耐風設計」の章を設け、次の事項を検討する。

「道路橋耐風設計便覧」の照査式 (特に $B/d < 5$ の場合の設計について)
ランガー橋などの細い垂直材の風による振動と疲労設計法
斜張橋の斜索の風による振動と制振対策
 - 2) 白鳥大橋の現場見学会の開催を講習講演小委員会と共同で検討する。
 - 3) 専門委員による勉強会を開催する。
10. 国際交流小委員会 (小委員長 林川俊郎)

北海道における国際的な学術交流に関する研究・調査活動を積極的に展開すべく国際交流小委員会を設置する。事業計画は以下の通りとする。

 - 1) 国際会議, セミナー等の日程を調査し, 資料を配布する。
 - 2) 最近の国際会議に関する情報収集を行い, 検討会を開催する。
 - 3) 海外からの橋梁関係の研究者が来札する場合, 講演会の開催を検討する。
 - 4) 第1回斜張橋に関する中日ワークショップ (10月2日, 札幌) への参画を検討する。
11. 「土木の日」写真パネル展 (渡辺昇)
 - 1) 開催期日 平成4年11月17日～11月23日
 - 2) 開催場所 札幌地下街オーロラスケアー
 - 3) 内容 北海道土木技術会のうち当研究委員会, 舗装研究委員会, 道路トンネル研究委員会などが共同事業として取組む, 具体的なテーマ, 組織は未定。

II. コンクリート研究委員会（昭和 31 年 6 月設立 会員 82 名）

（委員長 藤田嘉夫，副委員長 太田利隆，熊谷勝弘，幹事長 角田與史雄）

平成 3 年度 事業報告

1. コンクリート防災施設研究小委員会（委員長 福本 淳）

PC ロックシェッド標準設計ができるまでの暫定統一に関する検討を行い，第一次原案の作成，審議を行った。

2. 寒中コンクリート研究小委員会（委員長 藤田 嘉夫）

北海道内の土木工事を対象に寒中コンクリート工事に関するアンケートを実施，結果を分析し，報告書「北海道の土木工事における寒中コンクリートの施工実態」（委員会資料 No. 134）を作成した。また，「コンクリート工学」Vol. 29, No. 6 (1991. 6) に資料として公表した。

3. 北海道のコンクリート橋編集委員会（委員長 上田 正昭）

「北海道のコンクリート橋第 3 集」のための資料収集を行った。また，その発行予定を平成 4 年度とすることとし，行程を審議，決定した。

4. コンクリート構造物の耐用年数評価のための調査小委員会（委員長 佐伯 昇）

調査予定構造物（20 構造物）の現地調査をほぼ終了し，測定・採取資料の分析を行い，北大大形計算機センターのファイルにオンラインデータベースを構築した。

5. 設計仕様小委員会（委員長 上田 正昭）

北海道におけるコンクリート道路橋の設計及び施工指針（案）の作成を目的に，資料の収集と検討資料作成の分担について審議した。

6. 技術小委員会

技術小委員会は，共同研究や技術指導等の支援を目的として暫定的に設けられたもので，現在，技術小委員会 A（共同研究，主査 角田與史雄）および B（技術指導，主査 藤田嘉夫）の 2 つが活動している。

7. 講演会

1) 「土木の日」協賛講演会（H3. 11. 7 於 KKR 札幌 参加者 80 名）

「コンクリートの凍害に関する諸問題およびカナダにおける凍害の現状」

カナダ研究評議会建設研究所 Dr. G. G. Litvan

「東南アジアのコンクリート事情とアジア工科大学院大学」 北海道大学 上田 多門

2) コンクリート新技術に関する講演と映画の会—PC 斜張橋—

(H4. 3. 12 於 KKR 札幌 参加者 119 名)

「ミュンヘン大橋—非対象 2 径間連続 PC 斜張橋—」 札幌市建設局 後藤 孝雄

「青森ベイブリッジの施工」 鹿島建設㈱ 藤田 和仁

「海外における PC 斜張橋」 鹿島建設㈱技術研究所 野尻 陽一

8. 見学会

1) 第1回見学会 (H3.5.23 参加者 50名)

見学場所 白鳥大橋建設現場, 日鐵セメント室蘭工場

2) 第2回見学会 (H3.10.28 参加者 45名)

見学場所 地下鉄東豊線延長建設現場, 滝野すずらん丘陵公園, 朝里ダム建設現場

9. 「コンクリート教育の取り組み方」シンポジウム (H3.7.18~19) への協力

土木学会コンクリート教育研究小委員会 (委員長 藤田嘉夫) 主催の標記シンポジウムに協力した。

10. 土木学会コンクリート標準示方書改訂にともなう講習会への協力

北見土木技術協会主催の標記講習会 (H4.2.6 北見市) の後援を行った。

11. 土木学会コンクリート委員会への意見提言

標記委員会で審議中であったコンクリート標準示方書改訂案, 連続繊維研究小委員会報告書案, コンクリート用字および用語改訂案, J I S A 5308「レディーミクストコンクリート」改訂案等の内容の紹介を行うとともに, 必要に応じて本委員会から意見を提出した。

なお, 本委員会の役員改選があり, 委員長等は次の通りとなった。また, 事務局は従来, 北大に
おいていたが北海道開発コンサルタント㈱内に事務局を移設した。

委員長: 角田興史雄 副委員長: 太田 利隆, 熊谷 勝弘

幹事長: 佐伯 昇 事務局長: 藤井不二也

平成4年度事業計画

1. コンクリート防災施設研究小委員会 (委員長 福本 淳)

前年度に引き続きPCロックシェッド暫定統一に関する検討を行う。

2. 北海道のコンクリート橋編集委員会 (委員長 上田 正昭)

「北海道のコンクリート橋第3集」の発刊を目指し作業を行う。

3. コンクリート構造物の耐用年数評価のための調査小委員会 (委員長 佐伯 昇)

前年度に調査した構造物のデータおよびその他の有効なデータを用いて劣化予測式の検討を行い, 耐用年数評価手法を確立し, 報告書を作成する。

4. 設計仕様小委員会 (委員長 上田 正昭)

前年度に引き続き資料の収集を行うとともに, 検討資料の作成を行う。

5. 技術小委員会

既設の2つの技術小委員会が引き続き活動を行う。

6. 講演会・見学会

講演会, 見学会ともに2回程度実施する。

その他, 土木学会コンクリート委員会, 同構造工学委員会, 日本コンクリート工学協会研究委員会等と情報交換を行う。

III. 舗装研究委員会 (昭和 55 年 5 月設立 会員 76 名)

(委員長 久保 宏, 副委員長 新田 登, 幹事長 笠原 篤, 事務局長 高橋昌徳)

平成 3 年度 事業報告

1. 要綱仕様グループ (主査 荒井 秀方)

施工管理の合理化について、現場の要望事項をアンケート調査し、今後に向けた管理方法を検討した。

2. 講演講習グループ (主査 松村 享)

1) 研修見学会 (H3. 10. 29 参加者 25名)

見学場所：一般国道337号千翔ランプ橋架設工事、新千歳空港エプロン新設工事 etc., ウトナイ高架橋・液状対策工、柏原改良 (軟弱地盤処理・苫東大橋)

2) 「土木の日」写真パネル展

開催日 平成 3 年 11 月 19 日 (火) ~ 12 月 5 日 (木) 17 日間

場 所 中央区民センター (3 日間) JR 手稲駅 (4 日間)

手稲区民センター (7 日間) 武蔵女子短大 (3 日間)

展示内容 写真パネル 19 枚

3) 第 8 回舗装技術講習会 (H4. 1. 23 於 旭川市民文化会館 参加者 357名)

「軽交通舗装の施工と補修指針について」

鹿島道路札幌支店技術部長 辻 本 明 人

「旭川管内の道々の舗装について」 北海道旭川土木現業所道路建設課長 野 村 昌 信

「北海道の舗装廃材再生利用について」 北海道土木部道路課主任技師 菅 原 久 広

「アスファルト舗装要綱に関する質疑応答集について」

北海道開発局建設部道路建設課開発専門官 岡 崎 守

同 上 舗装係長 高 島 巧

3. 史料収集グループ (主査 三浦 宏)

「続・北海道舗装史」の刊行に向けて、昭和56年度以降の史料収集を継続中である。

4. 寒冷期施行グループ (主査 森吉 昭博)

アスファルト舗装体で耐久性の良いものを作るため、特に寒冷地ではどのように配慮すれば良いか検討し、現場見学と討論を通じて問題点を拾い上げた。

5. 維持補修グループ (主査 川村 和幸)

クラック補修に関するアンケートの検討および流動に関する基礎的検討を行った。

6. 新技術対応グループ (主査 武市 靖)

北海道において排水性舗装を適用する際の材料、配合設計、施工方法および排水機能の変化等に関する諸問題を明らかにすることを目的とし、平成 3 年度は北海道のご協力を得て、旭川

と帯広の道々で試験施工を実施し、現場研修会の開催と供用中の舗装の調査観測を行った。

7. 軽交通及び歩道舗装グループ (主査 島 征 夫)

北海道軽交通舗装設計要領(案)についての意識調査を行い内容を協議し、(案)を外すために必要な改訂事項について検討し、改訂作業を実施するために各章別に担当者を決定した。

8. 舗装マネジメントシステムグループ (主査 姫 野 賢 治)

アスファルト舗装要綱に記されている程度の技術内容には精通している道路管理者・施工業者等の道路技術者を対象とした舗装マネジメントシステムの入門書の作成を企画し、イラストの作画を含めてほぼ原案が完成した。

9. フロック舗装グループ (主査 佐 藤 巖)

ブロック舗装要領に記載する範囲を協議し、舗装要領にはレンガ並びにタイルを含めることにしたので、インターロッキングブロック舗装を始めこれらの舗装に関する基礎的な調査を行った。

平成4年度事業計画

本年度も昨年に引き続き、下記事業計画に基づき9つのワーキンググループの活発な活動を中心に事業の推進を計る。

1. 要綱仕様グループ (主査 岡 崎 守)

平成3年度に引続き早急に取りまとめ、施工管理の合理化に向けて検討する。

2. 講演講習グループ (主査 辻 本 明 人)

平成3年度に引続きワーキンググループの刊行資料により、舗装技術講習会を行うが、時代の要請に応じて舗装廃材の再生利用を新たなテーマに加え、道東地方における開催を計画する。また、新たな視点による研修見学会を検討する。

3. 史料収集グループ (主査 三 浦 宏)

引続き昭和56年度以降の史料を収集する。また、同時に刊行済の舗装史の中で、不十分な部分を補充するため、その史料を合わせて収集する。

4. 寒冷期施行グループ (主査 森 吉 昭 博)

アスファルト舗装の品質は材料、混合、施工等の種々の因子に左右される。本グループはこれら品質に影響を及ぼす因子について特にアスファルトの品質施工の2つについて寒冷期施工における現状について調査検討を行う。

5. 維持補修グループ (主査 川 村 和 幸)

舗装横断クラック、リフレクションクラックに関するアンケート調査票に関して、その集計分析を実施する。また、流動に関する取り組み方策の検討を行う。

6. 新技術対応グループ (主査 武 市 靖)

旭川と帯広の試験施工区間での調査観測データを取りまとめ寒冷地における排水性舗装の耐久性、排水機能の維持の観点から検討を加える。

また、一冬経過後の排水性舗装の状態を確認するために今年度も現場研修会を実施する。

7. 軽交通および歩道舗装グループ (主査 清 水 洋 勝)

軽交通舗装設計要領(案)のアンケート調査の結果に基づき、新アスファルト舗装要領との整合性を図り、軽交通舗装設計要領を刊行する。

8. 舗装マネジメントシステムグループ (主査 姫 野 賢 治)

平成3年度に企画した舗装マネジメントシステム入門書の出版を行うと同時に、これをテキストとする講演講習の実施を目指す。また、舗装マネジメントシステムの方向性について検討を行う。

9. ブロック舗装グループ (主査 佐 藤 巖)

「北海道におけるインターロッキング舗装要領(案)」と「インターロッキングブロック舗装設計施工要領」との整合性を図り、スモールエレメントを用いた「北海道におけるブロック舗装要領」を発行する。

IV. トンネル研究委員会(昭和60年11月設立 会員163名)

(委員長 芳村 仁, 副委員長 熊谷勝弘, 三浦弘志, 長縄 勉, 事務局長 林 脩)

平成3年度事業報告

1. 技術小委員会

1) トンネル台帳分科会

「北海道の道路トンネル第2集」発行に向けての準備

2) 変状トンネル分科会

- (1) 変状トンネルの調査・設計・対策要領(案)の作成
- (2) 現地調査(大沼トンネル, 小平トンネル, 三国トンネル)
- (3) 「'92トンネル技術の特別講演と技術研究発表会」で中間報告発表

3) 凍結防止分科会

- (1) 現地簡易燃焼試験の実施 2回
- (2) 断熱材改良研究現地施工 11/7 新野花南トンネル
- (3) 断熱材難燃化施工について日本道路会議発表(H3.10)
- (4) 平成2年度温度計データ分析及び解析
トンネル縦断方向施工延長の算定
同上について研究発表会にて発表(H4.2.28)
- (5) トンネル温度計測の実施

4) NATM分科会

- (1) 補助工法アンケート結果の解析終了, 研究発表会で発表(H4.2.28)
- (2) 汐の岬第2トンネルの解析終了
- (3) C計測データ解析
- (4) ACOS結果報告

5) 現地調査

調査トンネル名 銀河トンネル, 樹海トンネル, 三国トンネル
実施日 平成3年10月1日~2日(1泊2日)

6) 講演会

講演者 筑波大学教授 西岡 隆
実施日 平成3年11月27日

2. 講習講演小委員会

1) 現場見学会(H3.9.27 参加者 113名)

見学場所 樺立トンネル, 長橋トンネル

2) '92トンネル技術の特別講演と技術研究発表会

特別講演

「岩盤の時間依存性挙動とトンネル支保の設計, 施工」

東京大学工学部教授 西 松 裕 一

映 画

「野塚トンネル」—長大道路トンネル全断面工法の記録

「大断面トンネルの効率的施工SMB工法」—マイクロベンチ工法による効率的トンネル掘削

発表内容

「変状トンネルの調査, 設計・対策の考え方」 変状分科会 五十嵐 敏 彦 外2名

「寒冷地道路トンネル断熱材施工範囲の算定について」

凍結防止分科会 三 上 隆

「アンケートによる評価と支保工補助工法の選定に関する一試案」

NATM分科会 山 田 智 弘 外1名

「ミニベンチ工法によるトンネル掘削の施工について」

札幌開発建設部 関 口 誠 外1名

「極めて土被りの薄い未固結地山におけるCD・NATM (地下鉄東豊線月寒トンネル)」

札幌市交通局 相 馬 英 敏 外3名

「ロードヘッターによるトンネル掘削」 三井三池製作所 辻 和 時 外2名

平成3年度は上記の他, 会報第12号 (H3. 9), 第13号 (H4. 3) を発行し, 関係各所に配布した。

平成4年度事業計画

1. 技術小委員会

1) トンネル台帳分科会

「北海道のトンネル第2集」発行の準備を行う (平成4年度末発刊予定)。

2) 変状トンネル分科会

(1) 調査・設計・対策要領(案)の完成

検討課題 1. 対策工計画の検討 2. 設計例の取りまとめ 3. 評価手法の見直し

(2) 「データバンク」設置の検討

(3) 維持管理機関との打合わせ

3) 凍結防止分科会

(1) トンネル温度計測 (縮小, 継続)

(2) 断熱材改良研究 (継続)

施工1年後の取り出し分析

(3) 平成3年度温度計測データ分析および解析

トンネル縦断方向施工延長に対してはこれまでのデータによる見直し検討を行い、新たな調査は予定しない。また、岩種（凍上性の有無）による施工延長を検討する。

4) NATM分科会

- (1) C計測データ解析（継続）
- (2) ACOSの結果報告（継続）
- (3) 終息後の岩盤挙動調査、分析（新規）

ACOSの利用方法についてメンテナンスと貸出し法の検討を行う。

5) 施工分科会（新工法、新技術に関する研究）

2. 講習講演小委員会

1) 現地見学会

平成4年9月25日に新野花南トンネルの見学を予定している。

2) 研究発表会

平成5年2月19日に北海道大学学術交流会館で開催の予定である。

3) 「土木の日」の協賛事業

写真パネル展示を行う。

平成4年度は、上記のほか会報14号と15号を発行する予定である。

V. 道路研究委員会（昭和 29 年 6 月設立 会員 151 名）

（委員長 加来照俊，副委員長 東 紀夫，竹内政夫，幹事 中辻 隆，田口史雄
辻 信三，小長井宣生）

平成 3 年度 事業報告

1. 調査研究

次の調査研究を行い，報告書を全会員へ配布した。

- 1) 路面表示の視認性に関する研究—「高視認性区画線調査報告書（第 2 報）」
- 2) 交通渋滞対策に関する研究—「交通渋滞対策の定量化に関する研究」
- 3) トンネルの照度と視認性に関する研究—「トンネル内視認性に関する研究」

2. 講演会

- 1) 第 1 回「道路と自動車運転行動の人間工学」

（H4. 1. 31 於（社）札幌地方自動車整備振興会札幌教育センター 参加者 161名）

共催：（社）自動車技術会北海道支部 外 2 団体

「運動行動分析の現状」

（財）労働科学研究所労働生理・心理学研究部長 飯 田 祐 康

「現在測定可能な生体反応とその生理学的な意味」

（財）労働科学研究所第 1 研究室長 前 原 直 樹

- 2) 第 2 回「路車間通信システムの現状について」

（H4. 2. 27 於 北海道建設会館 参加者 85名）

共催：（社）自動車技術会北海道支部

「AMTICS について」

日本交通管理技術協会理事 岡 本 博 之

「RACS について」

建設省土木研究所道路部長 柴 田 正 雄

- 3) 第 3 回「冬期路面管理と気象情報システムについて」

（H4. 3. 11 於 KKR 札幌 参加者 72名）

共催：（社）自動車技術会北海道支部

「西欧の冬期路面管理の現状」

北海道開発局開発土木研究所交通研究室長 小長井 宣 生

「欧米の冬期路面管理と調査研究の最近の動向」

北海道開発局開発土木研究所防災雪氷研究室 加治屋 安 彦

「札幌市の冬期道路気象情報システム」

札幌総合情報センター（SNET）長谷川 親 義

「北方圏都市の冬期路面管理 第 5 回北方都市会議報告」

札幌市建設局道路維持部スパイクタイヤ課 川 端 隆

3. 技術資料の刊行

賛助会員各社技術，製品リストを各会員に配布

平成4年度事業計画

本年度も昨年に引き続き，下記事業計画にもとづき技術小委員会（5ワーキンググループ），講演・講習小委員会の活動を中心に事業の推進を計る。

1. 調査研究

1) 路面表示の視認性に関する研究

高輝度ライ，自動車・バイクの走行性，洗浄による効果

2) 冬期路面管理に関する研究

連続すべり試験，サーマルマッピング

3) 新しい視線誘導システムに関する研究

レーザーによる視線誘導システムの開発，冬期視定障害対策

4) 道路構造と交通事故に関する研究

交通事故分析システムの開発，交通事故事例調査分析に関する研究

2. 講演会

1) ドライビング・シュミレーター技術の現状（共催）

2) 車両の安全技術の現状（共催）

3) 国際シンポジウムの共催（西欧の冬期路面管理，講演会）

3. 技術資料の刊行

技術資料の刊行は隔年とし，今年度は発行しないこととする。

VI. 土質基礎研究委員会 (昭和 40 年 1 月設立 会員 240 名)

(委員長 土岐祥介, 副委員長 三田地利之, 森 康夫, 益田栄治, 事務局長 能登繁幸)

平成 3 年度 事業報告

1. 講習会小委員会 (小委員長 益田 栄 治)

- 1) フォーラム「高有機質土地盤を考える」(共催, 主催: 土質工学会)

(H3. 6. 14 於 北大学術交流会館 参加者 120 名)

「圧密沈下特性」 「強度特性」

- 2) 最近のサウンディング技術講習会 (共催, 主催: 北海道地質調査業協会)

(H3. 10. 25 於 北海道立地下資源調査所 参加者 80 名)

「講習, 実演, 展示」

2. 技術小委員会 (小委員長 三田地利之)

土質基礎に関する「Q&A」集の発行に向けて, 「Q」の受け入れ方法と「A」の回答方法について検討を行った。

3. 地盤図作成小委員会 (小委員長 西川 純 一)

- 1) 6 回の小委員会を開催し, 以下の項目について検討, 見本版を作成した。

- (1) データベースの見本版作成のための入力項目について
- (2) データベースの様式について
- (3) データベースの作成の際の入力ソフトについて

- 2) 前年度までの成果を土質工学会「データベースに関するシンポジウム」で発表

4. 事業拡大小委員会 (小委員長 森 康 夫)

- 1) 講演とビデオを見る会 (「土木の日」協賛事業)

(H3. 11. 8 於 KKR 札幌 参加者 130 名)

講演会 「インドネシア見たまま」

北海道開発局 本名 一 夫

ビデオ上映 「リサの地すべり」「泥炭地盤に挑む」「つなみ」「横浜ベイブリッジの礎」

- 2) 講演会 (北海道技術士センターと共催)

(H4. 3. 19 於 KKR 札幌 参加者 145 名)

「北海道における新たなプロジェクトの発掘について」 北海道開発局 高梁 喜 一

- 3) 今後の活動についてのアンケートの実施 (H3. 11. 8)

平成 4 年度 事業計画

講演会についての要望が多いことから, 既設の「講習会小委員会」を「講習講演小委員会」に名称変更し, 4 つの小委員会を中心に活動を推進することとする。

1. 講習講演委員会 (小委員長 益田 栄 治)

- 1) 賛助会社所有の各種工法・技術のうち、講習会形式でPRしたい工法・技術について、募集し、年2回(H4.9, H5.2)講習会を開催する。
 - 2) 講演とビデオを見る会を開催する(H4.11)
2. 技術小委員会(小委員長 三田地利之)
- 1) 土質基礎に関する「Q&A」集の発行
本会の会員に対してアンケートの形で質問・疑問を頂き、これに対して小委員会で回答を用意し、適当な時期にこれらをまとめて「Q&A」集の形にして会員に配布する。
3. 地盤図作成小委員会(小委員長 西川純一)
- 1) データベース作成の具体的動きを作る。
 - 2) 編纂委員会を平成4年度半ばを目処に設立する。
 - 3) 平成5年度を目標に道央版のデータベースの作成を始める。
4. 事業拡大小委員会(小委員長 森康夫)
- 1) 「杭に関する討論会」を企画する。
 - 2) サハリン研修旅行の可能性を探る。
 - 3) その他の事業の可能性について検討する。

研究委員会の活動から

平成3年度においてコンクリート研究委員会で行った講演会の中から講演概要を1題、舗装研究委員会で行った道路舗装写真展の模様について紹介致します。

なお、これらの各行事は「土木の日」の協賛事業として行われたものです。

「東南アジアのコンクリート事情とアジア工科大学院大学」講演概要

コンクリート研究委員会

経済の成長率が世界的にみても高い東南アジア、その中でも優等生的な存在がタイである。天使の都（タイ語でクルンテープ）と呼ばれる。タイの首都バンコクに1987年から1990年までの3年間滞在する機会を得た。タイおよび、私がおとずれた周辺国のコンクリートに関する事情と、タイ滞在中の勤務先であった、アジア工科大学院大学の紹介をする。

東南アジア諸国連合（ASEAN）のブルネイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ6カ国は、国民一人当たりのGNPでいえば500ドルから1300ドルと大きな開きがあるが、各国の首都に限ってみれば、GNPは高く、差も小さくなる。例えば、シンガポールは1000ドル以上と言われている。そういった大都市に初めて訪れる日本人の多くは、それまで持っていたイメージと異なる「先進国」東南アジアにまず驚く。

ジャカルタ、クアラルンプール、マニラ、シンガポール、バンコクといった大都市では、高層建築、高速道路等の建設が随所で行われている。バンコクでは、200件あまりの高層マンションの建築が進行中もしくは建築許可申請中というような状態であり、建築資材の不足で、工期が遅れるのは日常茶飯事である。建築物も、橋梁もほとんどがコンクリート構造で、プレストレストコンクリートも、建築物を始め、積極的に適用されている。200mを越える超高層のコンクリート建築物も建設中で、ダイナミック都市バンコクはまだまだ成長を続けそうである。タイ建設産業の90%以上は、この様な民間の需要より構成されている。建設ブームを支える、タイのセメント産業は、年間1500万トン以上の生産能力があるが、これでも追いつけず、セメントを輸入している。地盤沈下が有名なバンコクで、構造物を支える杭等を製作しているプレキャストコンクリート工場もフル操業である。世界的に有名なバンコクの交通渋滞を救う、高速道路の延長工事の最盛期であり、そのほとんどを占めるコンクリート高架橋の建設現場が随所で見られる。日本の建設会社が活躍しているのは皆さんご存じのとおりである。

シンガポールは、バンコクと比較すると、都市としてはより成熟度が高いが、高層建築、高速道路建設におけるコンクリート工事がやはり、いたるところで見られる。政府の厳しい法律のせいもあるが、シンガポールという街はたいへん清潔で美しい。この美しさの原因としてもうひとつ忘れてならないのは、コンクリート構造物の美しい景観である。構造的な美しさ、角に丸みをもたせるなどの構造細目としての美しさ、日本より進んでいるというのが初めて訪れたときの印象であった。日本が、シンガポールをODAの対象としているとは、信じられなかった。工業立国であるシ

ンガポールの技術水準の高さの原動力のひとつが、国立シンガポール大学である。市内の旧キャンパスから郊外へ移った新キャンパスは、広く美しく、我々にとっては羨ましい限りである。大学の研究活動を広報する展示センターがあり、我々にとっても見習うべき点がある。国立シンガポール大学では、アジア各国から多くの留学生が集まっており、研究活動も活発である。コンクリート工学の分野もその例外ではなく、そのスタッフは充実しており、耐久性、フェロセメント、せん断等の研究が盛んに行われている。

アジア工科大学院大学 (A I T) は、各国の財政的援助により運営されている国際大学院大学で、バンコクの郊外に美しく広大なキャンパスを持っている。アジア各国から約 10 倍の倍率の選考をくぐり抜けてきた優秀な学生が 700 名余り在籍しており、キャンパス内の公用語は英語である。日本人学生は 5 名程度と少ないが、大変国際的な環境の中で将来のパートナーとなるアジアの人々との人脈を作って帰国する。

日本からの援助は、大学の運営費、12 名の教官の派遣費、A I T にとって最も重要な援助国のひとつとなっている。10 ある専攻のうち、建設系が半分弱を占めている。その一つが、構造工学および施工学科で、日本からは、構造工学とコンクリート工学の教官が 1 名ずつ派遣されている。100 名余りいる教官の約半数は、先進国からの派遣教官で、残りは A I T が直接雇用しているアジア各国からの教官である。国籍でいうと 20 カ国以上である。例えば、私が在籍していた、構造工学および施工学科では、タイ人が 3 名、インド人が 1 名、ナイジェリア人が 1 名、スイス人が 1 名、日本人が 2 名といった具合であった。一方、学生は西はパキスタンから、東は日本までのアジアの国々を主体に、出身国数は 30 カ国にも上る。

ここで話される英語は、クイーンズイングリッシュでも、アメリカンでもなく、国際共通語としての英語である。米国のように、学生が教官を評価するのであるが、学生にとって最も分かりにくかったのはオーストラリア人の英語で、分かりやすかったのは日本人の英語であったという逸話があるくらいである。学外の仕事に振り回されず、優秀でまじめな学生と一緒に研究できるのであるから、仕事環境としては、大変良い。さらに、その質の良さで有名なタイ人労働力が、秘書として、実験室スタッフとして、バックアップしてくれる。じっくり研究してみたいという人には、最適な職場なのである。学生としても、教官としても、A I T は数年間過ごす価値のあるところである。日本ではまだあまり知られていないのが残念である。

これからの日本は、もっと西を向く必要があろう。まず最初に、アジアに、特に東南アジアに一度足を運ぶことから始めてはどうか。美しい浜辺の日暮れが皆さんを待ち受けている。

(文責 北海道大学工学部 上田多門)

「土木の日」道路舗装写真展

舗装研究委員会

11月18日を「土木の日」と土木学会が制定し、市民の方々に土木を広く理解していただくために、各種行事を行っていますことは各委員十分にご承知のことと存じます。

北海道土木技術会のいくつかの委員会は、すでに、「土木の日」を前後して各種行事を行って来ております。

舗装研究委員会では、平成2年度まで、土木の日のための行事を実施しておらず、北海道土木技術会から指摘を受け、平成3年度から活動を始めることを幹事会で決定した次第です。さて、実行するとなると資金面、人的な面で種々の問題があり、数回の幹事会を開き道路舗装写真展を行うこととしました。まず、各委員に道路舗装に関する写真の提供を依頼し、ネガを集める作業から始めました。それらのネガから、道路舗装写真展に出品する19点の作品の選定をおこない、6つ切りのおおきに引き出し、木製額に入れました。1点につき、その費用4,500円程度で済みました。

最大の問題は、会場探しにありました。会場費が無料の場所を、幹事が手分けして見つけ出し、会場関係各位のご好意により、お借りすることができました。

日時は、平成3年11月19日(火)から12月5日(木)までの17日間とし、会場は以下の通りです。

中央区民センター (11/19～11/21)

J R 手稲駅 (11/22～11/25)

手稲区民センター (11/26～12/ 2)

武蔵女子短大 (12/ 3～12/ 5)

土木屋の花嫁候補になるであろう女子学生にアピールするために、武蔵女子短大の学生ホールに展示いたしましたが、最初の主旨はどこへやら、据付撤去の作業をしたい委員が多く交通整理が大変でした。

各委員とも忙しいことから、会場に人員を配置せず、写真の紛失を覚悟いたしましたが、札幌市民のマナーの良さか、また持ち去るほどの魅力がなかったのかわかりませんが、一枚の紛失もありませんでした。その代わり写真に若干の説明文を付けるとともに、アンケート用紙を会場に置き、道路舗装写真展の感想を記入して戴きました。

写真展ですので、単に写真を並べる訳にもいかず、写真のテーマ作りを行いました。アンケートの集計結果から好評であったテーマの順位は以下の通りでした。

1. 昔と現在の道路の移り変わり
2. 珍しい舗装
3. 景観舗装
4. 交通安全対策
5. 人と自然にやさしい道路

また、アンケート用紙に記入されていました意見の主なものは次のようでした。

- この世界の人達の苦勞がよく分かった (50歳, 男性)
- 現代の土木工事や舗装技術を見ることができて良かった。今後も楽しみにして

おりますので是非続けて下さい (24歳, 女性)

- 札幌の空が昔きれいだったことが良く分かります。沢山の人が見てくれるといいですね (18歳, 女性)

- もっとテーマごとに対称させていくと面白いと思います (20歳, 女子学生)

このようなことから、初回の「土木の日」道路舗装写真展は成功に終わったと自負いたしております。今後ともこのような企画を続けていく所存でございますので、委員の皆様のご協力をお願いいたします。

最後に、会場を無料で提供して下さった関係各位のご好意に深く感謝いたします。

(文責 舗装研究委員会幹事長 笠 原 篤)

◎北海道土木技術会・歴代会長・副会長・幹事長名簿

昭和29～32年度	会長	齋藤 静 脩			
昭和33～38年度	会長	真井 耕 象	副会長	小崎 弘 郎	幹事長 古谷 浩 三
昭和39～48年度	会長	高橋敏五郎	副会長	伊福部宗夫, 古谷 浩 三	幹事長 河野 文 弘
昭和49～52年度	会長	横道 英 雄	副会長	古谷 浩 三, 林 正 道	幹事長 河野 文 弘
昭和53～59年度	会長	町田 利 武	副会長	尾崎 晃, 長縄 高 雄	幹事長 高橋 毅
昭和60～61年度	会長	尾崎 晃	副会長	長縄 高 雄, 渡辺 健	幹事長 久保 宏
昭和62～63年度	会長	尾崎 晃	副会長	長縄 高 雄, 渡辺 健	幹事長 太田 利 隆
平成元年度	会長	長縄 高 雄	副会長	菅原 照 雄, 久保 宏	幹事長 森 康 夫
平成2年度	会長	長縄 高 雄	副会長	菅原 照 雄, 高橋 陽 一	幹事長 森 康 夫
平成3年度	会長	菅原 照 雄	副会長	渡辺 健, 西本 藤 彦	幹事長 森 康 夫

◎北海道土木技術会役員 (平成4年7月～)

会 長	菅 原 照 雄	北海道大学名誉教授
副 会 長	渡 辺 健	草野作工㈱代表取締役社長
”	太 田 利 隆	北海道開発局開発土木研究所長
研究委員長	渡 辺 昇	北海道大学名誉教授
”	角 田 興 史 雄	北海道大学工学部土木工学科教授
”	久 保 宏	北海学園大学工学部土木工学科教授
”	芳 村 仁	北海道大学工学部土木工学科教授
”	加 来 照 俊	”
”	土 岐 祥 介	”
幹 事 長	森 康 夫	北海道開発局開発土木研究所研究調整官
幹 事	勝 俣 征 也	北海道開発コンサルタント㈱橋梁部技師長
”	佐 伯 昇	北海道大学工学部土木工学科教授
”	笠 原 篤	北海道工業大学工学部土木工学科教授
”	林 脩	北海道開発コンサルタント㈱取締役
”	小長井 宣 生	北海道開発局開発土木研究所交通研究室長
”	能 登 繁 幸	北海道開発局開発土木研究所構造部長
事務局主事	秋 田 稔	

北海道土木技術会規約

昭和33年9月17日 施行

昭和40年3月1日 一部改正

昭和61年10月27日 改正

第1章 総 則

- 第1条 本会は北海道土木技術会と称し札幌市に事務局をおく。
- 第2条 本会は北海道における土木事業ならびに土木技術の進展を図ることを目的とし、次の事業を行う。
- 1 重要な問題についての共同調査、研究、審議
 - 2 講演会等の開催による技術の向上および普及
 - 3 その他本会の目的を達成するために必要なこと
- 第3条 本会の会員は原則として、北海道在住で本会の主旨に賛同した者とする。

第2章 役員および会議

- 第4条 本会に次の役員をおく。
- 会長 1名 副会長 2名 幹事長 1名 幹事 若干名
研究委員会の委員長
- 2 役員任期は、2年とし再任は妨げない。
- 第5条 会長は本会を代表し会務を総括する。副会長は会長を補佐しその任務を代行する。幹事長および幹事は会長の指示を受けて会務を処理する。
- 第6条 幹事長、幹事および事務局主事は会長が委嘱する。
- 第7条 本会の運営に関し、助言を求めため会長の委嘱により顧問をおくことができる。
- 第8条 役員会は年1回以上開き会長が招集する。
- 第9条 役員会は次の事項を議決する。
- 1 事業および決算
 - 2 会長、副会長の選出
 - 3 規約の変更
 - 4 研究委員会の設置または廃止
 - 5 その他本会に関する重要な事項
- 第10条 幹事会は幹事長および幹事によって構成し、幹事長が必要と認めるとき随時これを開く。

第3章 研究委員会

- 第11条 本会には第2条の目的を達成するため研究委員会をおく。
- 第12条 研究委員会は、3名以上の会員の要請があるとき役員会の審議を経て設ける。
- 第13条 研究委員会の委員長は、会長が委嘱するものとし、その運営は別に定めるところによる。
- 第14条 会員は、研究委員長の委嘱を受けて委員会活動に参加することができる。

第4章 会則および付則

- 第15条 本会の事業年度は、毎年4月1日から3月31日までとする。
- 第16条 本会の運営に要する経費は、賛助金、その他をもってあてる。
- 第17条 この規約は昭和61年10月27日から実施する。